

「偶像の黄昏」（ランドルフ・ボーン）

— 翻訳と解題

前 川 玲 子

ここに訳出したものは、ランドルフ・ボーン（Randolph Silliman Bourne, 1886-1918）の論文「偶像の黄昏」（“Twilight of Idols”）の全文である。「偶像の黄昏」は、月刊文芸誌『セブン・アーツ』（*The Seven Arts*, 1916-17）の1917年10月号に発表された。本論文は、同誌に掲載されたボーンの一連の反戦論文——「戦争と知識人」（“The War and the Intellectuals,” 6月号）¹、「戦闘の風下で」（“Below the Battle,” 7月号）、「アメリカの戦略の崩壊」（“The Collapse of American Strategy,” 8月号）、「戦争日誌」（“A War Diary,” 9月号）の最後となるものである。1916年11月に創刊された『セブン・アーツ』は、このボーンの論文が発表された1917年10月号を最後に廃刊となったが、その主な理由は、同誌の出資者が編集者や寄稿者——特にボーンの戦争反対の姿勢に不満をもったからであった。ボーンの反戦論文はいわば『セブン・アーツ』

1 ボーンの代表的反戦論文「戦争と知識人」および、ボーンの伝記的背景や第一次世界大戦をめぐる論争については、拙稿「『戦争と知識人』（ランドルフ・ボーン）——翻訳と解題」『英文学評論』82（2010）：59-91を参照されたい。なお、ボーンの思想的変遷については、拙稿「ランドルフ・ボーン再考——第一次世界大戦下のアメリカ知識人」『アメリカ史研究』27（2004）：20-34も参照されたい。

の命取りとなったわけだが、ここで、ボーンと『セブン・アーツ』との関係について、若干触れておくことにしよう。

『セブン・アーツ』の創刊編集者で詩人のジェイムズ・オッペンハイム (James Oppenheim, 1882-1932) の回想録によれば、ボーンがオッペンハイムを訪ねたのは、アメリカが第一次世界大戦に参戦した1917年4月直後の頃だった。「僕が思うに、彼は当時集まってきた多才な頭脳や想像力の持ち主のなかでも『真のリーダー』だった。もし、彼が生きていれば、20年代はもっと輝かしいものになっていたかもしれない」と、オッペンハイムは記している。「障害者であり、喘息に苦しみ、何よりも牢獄に行くことを恐れていた若者」が、「牢獄行きも覚悟したこの上ない勇気をもって」、「戦争と知識人」に始まる一連の論文を寄稿したことに、あらためて驚きと感嘆の念を表明している。雑誌廃刊にいたる当時の雰囲気に関して、「『ニューヨーク・トリビューン』は『国賊ども』と叫び、ボーンや僕たちに罵詈雑言を浴びせ」、副編集者だった文芸評論家ヴァン・ワイク・ブルックス (Van Wyck Brooks, 1886-1963)² や寄稿者の一人であった詩人のエイミー・ローウェル (Amy Lowell, 1874-1925) らも戦争に対する立場の違いから、『セブン・アーツ』を離れていき、最終的に、上流階級の出資者の女性は「反逆罪という言葉に恐れをなし」、出資を打ち切ったと説明している。「最後には、我々の雑誌の終焉の主たる原因となったとはいえ、ボーンが『セブン・アーツ』に加わったことは、僕たちにとって最

2 ブルックスについては、James Hoopes, *Van Wyck Brooks: In Search of American Culture* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1977)；菅原文彦「ヴァン・ワイク・ブルックスの『進歩主義』批判」『アメリカ研究』24 (1990) などが参考になる。ブルックスはその自伝の中で「私は、『セブン・アーツ』の出資者と同じく、ボーンの反戦の立場を受け入れることができなかった」と書いている。詳しくは、Van Wyck Brooks, *An Autobiography* (New York: E.P. Dutton & Co., 1965), 286 を参照されたい。

も素晴らしい出来事だったのだ³と語るオッペンハイムは、なぜ、自ら立ち上げた文芸雑誌を犠牲にしてまで、ボーンの戦争反対の立場を擁護したのだろうか。

オッペンハイムによれば、ボーンは「戦争こそが芸術と批評の時期を終わらせ、短い輝きを見せたルネサンスを終焉させた」と考えた。そしてこの戦争は、「今まで日の目を見なかったアメリカの才能を一同に集め、隠れた場所や多様な人種の起源からそうした才能を呼び覚まそうとした『セブン・アーツ』の息の根を止めてしまう危険があった」。「だからこそ、ボーンを最後まで支持することがどうしても必要だと思われた⁴」というのである。確かに短命に終わった『セブン・アーツ』は、アメリカの文芸誌の中でも稀有な特徴をもった雑誌であった。まず、オッペンハイム、および当初から編集に携わった小説家のウォルド・フランク (Wald Frank, 1889-1967)、音楽評論家のポール・ローゼンフェルド (Paul Rosenfeld, 1890-1946)、詩人のルイス・ウンターマイアー (Louis Untermeyer, 1885-1977) などはユダヤ系であり、それにアングロ・サクソンの出自を持つブルックスやボーンなどが加わった。ニューヨーク知識人の系譜を辿ったトーマス・ベンダーは、『セブン・アーツ』を、「多様な民族的特徴を内包しているアメリカ独自の国民的文化を代弁しようとした最初のキリスト教徒とユダヤ教徒との共同作業の一例」であったと形容している⁵。同時に、ボーンを含めた第一次世界大戦前の「若き知識人たち」(“Young Intellectuals”)の群像を追ったケーシー・ネルソン・ブレイクが示唆するように、「『セブン・アーツ』の編集者たちは、「アメリカの文化的生活により多く

3 James Oppenheim, “The Story of the Seven Arts,” *The American Mercury* 20 (June 1930), 163-64.

4 Ibid., 163.

5 Thomas Bender, *New York Intellect: A History of Intellectual Life in New York City, From 1750 to the Beginnings of Our Own Time* (New York: Alfred A. Knopf, 1987), 241.

の多様性を認めるようなコスモポリタンのなビジョンに深く関わりあって」⁶いた。『セブン・アーツ』の寄稿者には、シャーウッド・アンダーソン、ジョン・ドス・パソス、セオドア・ドライザーやロバート・フロストなどの当時新進のアメリカ作家や詩人がいた一方で、ロマン・ロラン、D・H・ロレンス、バートランド・ラッセル、ジョン・バトラー・イエーツなど世界的な巨匠たちが含まれていた。さらに、「若きインド」、「若きスペイン」、「最も若きアイルランド」といった外国の新しい文学潮流を紹介する欄もあり、『新思潮』の同人で、1917年当時アメリカに留学中だった後のフランス文学者成瀬正一が、「若き日本」(“Young Japan,” 1917年4月号)という一文を寄せている⁷。

こうした『セブン・アーツ』のコスモポリタニズムは、ボーンが1916年7月号の『アトランティック・マンスリー』に掲載した論文「トランス・ナショナル・アメリカ」とも通底するものだった。この論文の中で、「国粹的な愛国主義、そして激しい高まりを見せた諸国民の誇りと自意識がヨーロッパにもたらした数えきれない災い」を嘆くボーンは、様々な民族や国をその出自とし、多様な文化を継承する人々が「国際的な国民」(international nation)の一員として未来志向のアメリカ文化を作り出していくというビジョンを提唱した⁸。第一次世界大戦という危機の最中での芸術家たちの「トランス・ナショナル」な

6 Casey Nelson Blake, *Beloved Community: The Cultural Criticism of Randolph Bourne, Van Wyck Brooks, Waldo Frank and Lewis Mumford* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1990), 123.

7 Naruse Seichi, “Young Japan,” *The Seven Arts* 1 (April 1917): 616–26. 成瀬のアメリカ留学中(1917年8月～1918年3月)のウォルド・フランクやエルンスト・ブロッホとの交流、成瀬と同じくロマン・ロランに傾倒していたフランクから『セブン・アーツ』への寄稿を依頼された経過については、関口安義『評伝成瀬正一』(日本エディタースクール、1994)の第六章に詳しい。

8 Randolph Bourne, “Trans-National America,” in Carl Resek, ed., *War and the Intellectuals: Collected Essays 1915–1919* (1964; New York: Hackett Publishing Company, 1999), 107–123.

連帯の可能性を指向した点で、ボーンとオッペンハイムには共通する想いがあったといえる。したがって、オッペンハイムがボーンの反戦姿勢を擁護したのは、彼らの中で政治的関心と文化的関心が離れがたく結びついていたためでもあった。戦争によって終焉を余儀なくされるのは、1910年代のシカゴ・ルネサンスやグリーニッジ・ビレッジに集まった芸術家たちのコミュニティといった個別の文化的運動⁹に留まらなかった。戦争によって危機に瀕していたのは、狭量なナショナリズムに囚われずコスモポリタニズムの理想を掲げる文化の可能性そのものだったのである。こうしたオッペンハイムやボーンの危機感が、はからずも一つの文芸誌を「政治的」に先鋭化させたといえる。

それでは、『セブン・アーツ』の最終号に掲載されたボーンの論文「偶像の黄昏」は、どのような意匠をもつ作品であろうか。そのタイトルは、フリードリッヒ・ニーチェの『偶像の黄昏』(1889)の英訳タイトル(*Twilight of the Idols*)から借用したもので、ブルース・クレイトンは、このタイトルに関し、「『戦争と知識人』以後、さらに深まったボーンの暗くて怒りに満ちた心情を如実に示すものだ」と述べている¹⁰。第一次世界大戦へのアメリカの参戦に対して、反対から支持へと態度を覆した知識人の言説に対する極めて論理的な糾弾

9 中西部からシカゴに集まったカール・サンドバーグなどの詩人やアンダーソンなどの小説家たちの文芸活動を指すシカゴ・ルネサンスおよび、ラディカルな政治活動とフロイト主義や新しい文学潮流に関心をもったジョン・リード(John Reed, 1887-1920)、マックス・イーストマン(Max Eastman, 1883-1969)、フロイド・デル(Floyd Dell, 1887-1969)、フランク・ブルックス、ボーンなどの第一次世界大戦前の知識人グループについては、Bruce Clayton, *Forgotten Prophet: The Life of Randolph Bourne* (1984; Columbia: University of Missouri Press, 1998), 32; Bender, *New York Intellect*, 228-232; Max Eastman, *Enjoyment of Living* (New York: Harper & Brothers, 1948); Granville Hicks, *John Reed: The Making of a Revolutionary* (New York: Macmillan, 1936)などを参照されたい。

10 Clayton, *Forgotten Prophet*, 224. なお、ニーチェについては、原祐訳『偶像の黄昏——反キリスト者』(筑摩書房、1994)、湯田豊『ニーチェ「偶像のたそがれ」を読む』(勁草書房、1992)などを参照した。

の書であり、少数派であっても最後まで「非妥協者」(“the irreconcilable”)であることの意義を問うた「戦争と知識人」と比較すると、「偶像の黄昏」には、ボーンの失望感、喪失感、苛立ちの感情が色濃く影を落としていることは事実である。さらに、ニーチェの「いかに人は鉄槌をもって哲学するか」という副題が示唆するような、偶像破壊的な挑戦的姿勢を身にまとい、コロンビア大学時代の恩師ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952)、彼が代表する哲学、戦争賛成派に転じたジョン・スパルゴ (John Spargo, 1876-1966) や A・M・サイモンズ (Algie M. Simons, 1870-1950) のような元社会主義者——すなわちボーンとその世代にとっての偶像たち——に怒りの鉄槌を打ち落としている感もある。しかし、「偶像の黄昏」を、単に、反戦の立場のために執筆の機会を閉ざされた、一人の政治的にラディカルな文学青年のルサンチマンの産物として読むことはできないように思える。さらに、逡巡を経て参戦支持に回った恩師デューイへの個人攻撃の文書としてのみ読むことでも、ボーンの複雑で錯綜した感情、自分が生きた時代とその思潮へのエレジー、残された課題への挑戦の意欲などを見落とすことになろう¹¹。

11 Alan Ryan, *John Dewey: And the High Tide of American Liberalism* (New York: W. W. Norton & Company, 1995); Robert B. Westbrook, *John Dewey and American Democracy* (Ithaca: Cornell University Press, 1991); 小西中和「第一次世界大戦をめぐるボーンとデューイの対立」『彦根論叢』359 (2006): 83-98などは、デューイの思想的発展の視点から、ボーンとデューイの思想の違いについて示唆に富む分析を行っている。デューイはボーンに公式に返答することはなかったが、その思想的変遷に教え子の論文が何らかの影響を与えたのではないと思われる。1918年12月22日に他界したボーンにとって、その最後の一年は、自らの思想を内省的に見つめ直す時期であったとすれば、デューイやその他の知識人も、戦時体制のなかで、言論弾圧などの事態に対して新たな認識を迫られていた。最近のエッセイで紀平英作は社会党機関紙の発行停止やIWWの指導者の訴追、またボーンの母校でありデューイが哲学科教授を務めたコロンビア大学での徴兵反対教員の処分[1917年10月コロンビア大学で、参戦に反対した二人の教授が免職処分を受けた]などの一連の出来事のうねりのなかで、「一七年から一八年初めまで参戦を支持してい

第一次世界大戦前のアメリカの「若き知識人たち」は、マルクス、フロイト、ニーチェ、トルストイ、ロマン・ロランなどのヨーロッパの思想家の影響を受けながら、それをエマソンやソロー、ウィットマンなどの「アメリカン・ルネサンス」の系譜に接ぎ木し、「利用可能な過去」を作り出そうとした。ボーンもまた、学生時代から1914年のヨーロッパ留学の時期を含め、様々な思想潮流から折衷主義的に吸収し、それを武器に、イギリス文化人の垂流的存在に甘んじるアメリカの文化的エリートに対し批判の眼を向けてきた¹²。ボーンが『セブン・アーツ』に書いた最初の論文「ピューリタンの力への意思」(“The Puritan’s Will to Power,” 1917年4月号)¹³でも、ニーチェの「力への意思」の概念の借用が見られ、ニーチェ崇拜者であったジャーナリストH・L・メンケン(H. L. Mencken, 1880–1956)¹⁴を含めて、この時代に盛んであったピューリタンとピューリタニズムへの批判が展開されている。ボーンによれば、自分自身および他者に禁欲と抑圧を求めるピューリタンの力への意志は、アングロ・サク

ゝたりべらる知識人の相当数が、政権への批判的姿勢に転じ、知識人独自の役割を自省する志向を強めた」と指摘し、デューイが1918年11月に『ニュー・リパブリック』に発表した論文「不条理の礼賛」[“The Cult of the Irrationality,” *New Republic* (November 9, 1918)]は、「そうした彼らが抱える新しい視点を明快に言説化する論説であった」としている。これについては、紀平英作「ニュースクール——しなやかな反骨者たちの軌跡(一)」『図書』(2014年10月): 24–29を参照されたい。また、第一世界大戦後、デューイが戦争違法化運動に参加したことについては、三牧聖子『戦争違法化運動の時代——「危機の20年」のアメリカ国際関係思想』(名古屋大学出版局、2014)に詳しい。

12 Blake, *Beloved Community*, 123, 150; Clayton, *Forgotten Prophet*, 111; Edward Abrahams, *The Lyrical Left: Randolph Bourne, Alfred Stieglitz and the Origins of Cultural Radicalism in America* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1986), 32.

13 Randolph Bourne, “The Puritan’s Will to Power,” in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 156–61.

14 メンケンは、*The Philosophy of Friedrich Nietzsche* (1907) や *The Gist of Nietzsche* (1910) などの著者であり、アメリカでの初期のニーチェの受容に影響を与えた。

ソンの純血を求める移民禁止論者の優生保護思想として、個の発展よりもビジネスの優位として、個人の自由や解放を阻む禁欲主義として、野蛮を追放して文明の開化を求める開拓者の論理、そして帝国主義として発現しているというのである。文化史家サスマンが示唆したように¹⁵、ボーンらの「若き知識人たち」は、国家の興隆といった集団的「善」あるいは「健全さ」のためには、個人は歯車としてその可能性や生への欲求を犠牲にしなければならないといった「文明の思想」に対して、個の自己実現を可能にする「文化の思想」を主張したともいえるだろう。

ボーンは、戦争に勝つことが至上命令となった状況下で、その目標を達成させるための戦争テクニックが全てとなり、あるべき生き方や社会の進むべき道といった価値観の模索は忘れ去られていると考えた。戦時体制の下、デューイの教え子たちは、目的達成のための最も効率的な道具となるべく、各自が技師として、官僚として、兵士として最大限にその力を発揮している。これがプラグマティズムの実践だというならば、デューイの教育は大成功を収めた、ボーンはアイロニカルな調子でいう。この論理でいえば、戦争の波にのってそれを制御しようという意志のない反戦論者は、単に無為のやから、あるいは何事にもネガティブな「どうしようもない連中」(“impossibilist”)ということになる。デューイは、『ニュー・リパブリック』の1917年7月14日号の「良心と強制」という論文の中で、良心的徴兵拒否者の「倫理的不毛」に言及し、「彼らの良心を、戦争の流れとは別の方向に動いている力に結びつける」ように助言した¹⁶。これに反発したボーンは、「創造的知性を掲げる哲学者であっても、戦争の只中では、目的の選択、そして方法の選択の余地をなくしてしまう。

15 Warren I. Susman, *Culture as History: The Transformation of American Society in the Twentieth Century* (New York: Pantheon Books, 1984), Chapter 4 & 6.

16 John Dewey, “Conscience and Compulsion,” in Lillian Schlissel, ed., *The World of Randolph Bourne* (New York: E.P. Dutton, 1965), 129.

だからこそ私は、どんな目的のためであれ、その目的成就のテクニックとして戦争を用いることに断固として反対する」¹⁷と応じたのである。ボーンは、プラグマティズムは、可変的で柔軟で、自由意志が活動の場を持てるような宇宙を前提にしていると考えた。したがって、デューイのようなプラグマティストが、そのような前提そのものを崩してしまう戦争——冷酷で無慈悲な絶対物(“the inexorable”)——を、環境、組織、制度を能動的に変えていく手段として用いることができるというのは論理の破綻であるか、戦争による一時的思考停止状況かのいずれかであると論難したのである。

それでは、今ボーンたちにできることは何か。「偶像の黄昏」の中でボーンは、価値よりもテクニックを優先させる道具主義的なプラグマティズムに対して、より可変的で流動的な世界の中での個人の発展を前提にしたウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムを、もう一度蘇らせようと提案している。だが、一方で彼は、戦争という冷酷で無慈悲なものが現実となった今、ジェイムズもデューイも、そして彼らを模範として生きてきたボーンたち「若き知識人たち」も、ともに消え去るべき黄昏の時を迎えたと感じていたようにも思える。しかし、やり残した仕事はある。テクニックとコントロールが全てに優先するような世界で、「詩的ビジョン」がなくては行けないと、ボーンは言う。たしかにこのビジョンは「偶像の黄昏」の中でも、曖昧で捉えどころがない側面がある。しかし、彼は一見ニヒリスティックなマスクをつけながらも、自分たちのような「不満分子」(malcontents)にこそ、現状を打破する希望の光があるかもしれない、文頭の「アメリカの約束」(“American promise”)を成就するのは自分たちかもしれないと、この論文を締めくくるのである。

ボーンは、第一次世界大戦直後にスペイン風邪にかかって夭折するが、その

17 Randolph Bourne, “Conscience and Intelligence in War,” in Schlissel, ed., *The World of Randolph Bourne*, 131. この論文の初出は、『ダイアル』(*The Dial*) の1917年9月13日号である。

前に、「文学的ラディカルの歴史」¹⁸という自伝的作品と、「国家」¹⁹という社会学的・政治的な論稿を書きあげた。「偶像の黄昏」は、彼の知的活動の終わりを意味するというよりもむしろ、第一次世界大戦によって否応なく対決することを迫られた「国家」という怪物、そして、出産時と幼少期の偶発的な事故で障害を抱えながら、なお知的な健康を保ち続けようとした自分自身に向かい合ったボーンの若き晩年の始まりでもあった。

ボーンの作品は、あたかも彼自身が暗闇のなかで、手探りで進んでいくといったところがある。このためか、翻訳という作業自体も手探りで行われ、絶対的な定訳というものは成立しにくいように思える。したがって、この試訳が原文へと読者を誘い、異なる解釈や作者との対話を生み出す契機になることを望みたい。なお、試訳にあたって底本として用いた版は、Carl Resek, ed., *War and the Intellectuals: Collected Essays 1915-1919* (Harper & Row, 1964) の1999年リプリント版 (Hackett Publishing Company) である。Resek は2箇所注をいれているが、加えて、その他現代の読者にわかりにくいところには注をつけた。また、言及された本や人物の邦訳には複数のものがあるので、混乱しやすいものには原語を注に記した。最後に、便宜上、翻訳の中の注は Resek の注も含めて通し番号とし、括弧をつけて底本の番号を記すことにする。

18 拙稿『『文学的ラディカルの歴史』(ランドルフ・ボーン)——翻訳と解題』『英文学評論』81 (2009) : 93-123 を参照されたい。

19 Randolph Bourne, "The State," in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 65-104.

ランドルフ・ボーン「偶像たちの黄昏」¹

I

アメリカの約束が成就されるための種子はどこにあるのであろうか。人は政治のみで生きる者にあらずだが、我々の最高の知性の主たちが、現在の政治的潮流の渦中に巻き込まれ、世界を作り変えることにアメリカ魂を見出しているのには失望させられる。もしウィリアム・ジェイムズが存命であれば、戦争状況をかくも易々と、かつ満足げに受け入れたであろうか。彼は、現在の状況を平然とは受け入れられないと感じている平和を愛する理想家たちを揶揄したり、「戦場での戦闘を超越して」闘っている哀れな一握りの連中をリベラルな進歩の同盟軍から追放したりしていたであろうか。僕は、彼の勇敢な精神は、勇敢な戦いが行われることを、つまり、国内の民主主義的価値観を守り、また博愛主義的な帝国主義者の単なる寄せ集め²以上のものを約束する和平のために、国外の民主主義的勢力と徹底した同盟を組むことを呼びかけたと信じたい。僕が今ジェイムズに想いを馳せるのは、ジョン・デューイの最近の一連の論文を読んでも、彼の思想には、我々の道標になったり心を掻き立てたりするものが

1 *The Seven Arts*, II (Oct, 1917), 688-702. [原注 1]

2 原文では、“union of benevolent imperialisms”とあり、これは、英米仏政府がみずからをドイツ、ロシアなどの帝国に対して戦っている民主主義連盟と規定していることにに関して、ボーンが、英米仏も敵対する帝国主義諸国と変わらぬ政治的・軍事的・経済的野心をもつ「博愛主義的（慈悲深い）」仮面をかぶった帝国主義者とみなしていたことを示すものと思われる。「戦争と知識人」のなかで、ボーンは、「我々アメリカ人だけが倫理的に非の打ちどころがないという神がかりじみた直感はどこからきているのか。アメリカ人の自国の正しさへの確信にもかかわらず、歴史は、いずれこの戦争の背後にある巨大な経済的および帝国主義的な諸力を解明するであろう」(Bourne, “The War and the Intellectuals,” in Resek, ed., *The War and the Intellectuals*, 7; 拙論「『戦争と知識人』(ランドルフ・ボーン)——翻訳と解題」, 78)と述べている。

ないし、この非常時に際して、人生哲学としての彼のプラグマティズムの限界を感じさせるからだ。果たして、ジェイムズが、この国家的事業はアメリカの将来のために創造的なものだと思わせるような一種の精神的冒険の気風を醸し出したかどうかは、知るよしもない。しかし、確かに、我々がかくも長くかくも無批判に従ってきたデューイの哲学は、目下の危機に対する解釈をひねり出すために使用されるとき、バリバリと音を立てんばかりに崩れていくのだ。『ニュー・リパブリック』に立て続けに掲載されたデューイの論文——「良心と強制」、「平和主義の将来」、「アメリカは何のために闘うのか」、「思想の徴兵」³は、僕にはやや色褪せたものに思える。戦争の不気味な力を少しも感じず、軍事政策の行き過ぎよりも平和主義者の行き過ぎを心配し、思想を徴兵しようなどと考える人間がいることを単に可笑しがり、戦争テクニクと数々の不正や憎しみは切っても切り離せない関係にあることを忘れて、群集のファナティシズムという副産物なしに戦争テクニクを用いることができるという前提に基づいている哲学者は、僕とは異質の若き知識人たちに語りかけているのだ。明らかに、戦争が呼びかけている一連の心構えは、希望に満ち知的な想像力につながるものとしてデューイ教授がこれまでとってきた心的態度よりも、もっと荒々しく不安定なものである。彼のプラグマティスト的精神は、こうした新たな要請に順応しようとして、まるで乾ききった平原に挑戦しようとしている開拓者のように、太刀打ちできない巨大な力と取っ組み合いをしている印象を与える。我々の国の精神は今、創造的知性の領域ではなく、群集心理の領域の渦中にある。マックス・イーストマン⁴をリンチしようとした兵士たちは、現

3 John Dewey, "Conscience and Compulsion," *New Republic* 11 (July 14, 1917); "The Future of Pacifism," *New Republic* 11 (July 28, 1917); "What America Will Fight For," *New Republic* 12 (August 18, 1917); "Conscription of Thought," *New Republic* 12 (September 1, 1917).

4 マックス・イーストマンは、ボーン、エイモス・ピンチョット (Amos Pinchot)、ウィンソロップ・レイン (Winthrop D. Lane) などと共に、議会に参戦しないよう

在の愛国主義が、世界を再生させるという意志の産物ではないことを示している。平時には許されそうもない憎悪の爆発的で奔放な放出を求めている連中を、感傷的でもっともらしい言葉で説得することは不可能であるし、こうした憎しみの感情は、またとないリベラルな政治基盤を創造するための原材料とはならないのである。出来ることと言えば、こうした感情の流出が起こるような状況に、この国が関わらないようにすることだ。しかしながら、もし、自らの意志でこの状況の出現を望み、それを不可避なものとして受け入れるなら、憎悪や恐れや脅しが華々しい放蕩三昧を繰り返すことに抗議してみても愚かたしかいいようがない。こうした感情は、最後に無謀で有害な戦争の毒が、廃墟と幻滅という自家製の解毒剤を作り出すときまで、とどまることを知らず高まっていくものだから。あたかも、戦争とは、こうした有毒なもの以外でありうると語ることは、あなたの哲学が、道なきものや冷厳無慈悲なものに直面したことがないこと、そして、変化をおぼろげに感じながら、いままでと同じように行動して、まだ自分の能力を超えるところまでいっていないかのようにふるまっていることを、示している。デューイの最近の言辞がなんともお粗末なのは、戦時のアメリカが否応なく見せることになる粗野で非合理的で非創造的な人間性の支配する世界に対する彼の経験の欠如のせいである。デューイは、戦争が

に働きかけることを世論に訴える反戦広告 ["Do the People Want War?" *New Republic* 10 (March 3, 1917), 145. Advertisement, signed by Bourne and others of the "Committee for democratic Control"] に署名した。彼らは、1917年の2月10日、17日、3月31日に掲載された同様の反戦広告にも署名している。Sherman Paul, *Randolph Bourne* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1966), 39; John Adam Moreau, *Randolph Bourne — Legend and Reality* (Washington, D. C: Public Affairs Press, 1966), 143-44などを参照されたい。なお、イーストマンがデルヤリードと共に編集に携わったラディカルな雑誌『マッシズ』(*The Masses*, 1911-17)は、1917年8月、最後の号となる7月号に反戦的な記事とイラストが掲載されたとして、防諜法 (Espionage Act of 1917) に基づく郵送許可取り消し処分を受け、事実上の発行停止となった。

始まる直前に、一瞬躊躇したときがあった。そのとき、戦争とその国外での諸目的および連合勢力は、アメリカの約束を果たすべき国内での冒険に比べてみると、実に些細なことに思われたのだ。しかし今は、こうした視点は消え去り、果たして我々は理想主義をすべて結集させるべき事業に取り組んでいるのかという懷疑などは、全く見られない。我が国の戦争努力とひきかえに、連合軍が民主主義的な世界秩序形成の義務を負うという保障をとりつけることに失敗したことに對して、デューイは、平和主義者の変節に責任を押し付けている。そして、自分自身に関しては、この参戦と世界的民主主義秩序形成という戦略上の致命的な連関を先頭に立て、彼の言葉では「ロマンティックに」主張してきた「我々」の陣営の一員だと主張するのである。彼が自らを非民主主義的に操作された外交方針と容易く同一化するとき、その含むところは次のいずれかである。つまり、政府のやることを受けいれるときに国は民主主義的だということである。あるいは、戦争はデューイのプラグマティックな精神を麻痺させてしまうような作用を及ぼしているのである。というのも、どういうわけかデューイは、みずからは国の舵取りをしている階級の一員だという感覚を保持しており、かつては彼の弟子であったが今は戦争を忌まわしいと感じている民主主義者たちの不安にかられた質問を無視しているのだ。

いま僕が感じているのは、窮地の最中に突然、置き去りにされてしまったような感覚である。つまり僕たちが前に進んでいくために依拠してきた哲学が、もはや機能しないことに突如気づいたような気持ちである。僕には、創造的知性は戦時において自由に機能するという考えと、冷酷無慈悲な状況という事実との間の落差はあまりにも際立っているように思える。民主主義的価値観を保全するために、本来リベラルがすべきことや言うべきことと、現実の諸力が彼らに押し付けていることとの間にかくも明白な落差があることに、僕の知的感覚は容赦なく打ちのめされたような衝撃を覚える。この狂ったような半ば崩壊した世界の中で、まだ全て良い方向にいくことができると性懲りもなく仄めかし続ける樂觀主義に憑かれた雰囲気よりも、むしろ戦争を救いようのない

恐ろしい浄化剤だとみなす哲学のほうがまだましなくらいだ。こうした災禍に直面して、もしかしたらジェイムズなら、彼の「戦争の倫理的代替物」⁵を放棄し、戦争がもたらす確実な害毒に対する予防接種の機能を果たしたかもしれない「不道德な代替物」——ローマの農神サトゥルヌスの祭りのような一瞬の底抜けのお祭り騒ぎを選んだかもしれない。

II

デューイの哲学は、繁栄し、進歩的な善意に満ちた平時の社会では、十分に我々を奮い立たせるものである。それは希望の哲学、素材と方法に関する先見力のある理解に基づく哲学である。組織に柔軟性があるときには、それは改善のための唯一の手がかりになるものである。それは、「意気の高揚」のために適用される科学的な方法なのだ。しかし、この望ましい目的に対して慎重に手段を適応させようとする、共同体の生活の利益のために凶暴な諸力や機能不全に陥ったものを制御しようとする実験的試みというのは、理性の蓄積に依

5 William James, "The Moral Equivalent of War," in *Essays on Faith and Morals*, selected by Ralph Barton Perry (New York: Meridian Books, 1962), 311-28. このエッセイの初出と転載は次のとおりである。Association for International Conciliation, Leaflet, no. 27, 1910; *McClure's Magazine*, August 1910; *The Popular Science Monthly*, October, 1910. ジェイムズはこのエッセイで、まず好戦的な論客に言及し、「彼にとって戦争能力の保持は国民の健康 (health) を測る基準であった」として、戦争を健康、血流、血潮、男らしさといった言葉と結びつける傾向が米西戦争以降アメリカの好戦派に顕著であったことを批判的に論じ、「戦争の倫理的代替物」としての若者への教育を提言している。ジェイムズからインスピレーションを得たボーンは、1916年7月1日号の『ニュー・リパブリック』に掲載された論文「徴兵制の倫理的代替物」において、「我々に必要なのは死に方を学ぶことではなく生き方を学ぶことであり、破壊のための技術者になることなく、教師や創造者になることだ」と主張した。Randolph Bourne, "A Moral Equivalent for Universal Military Service," in Resek, ed., *War and the Intellectuals*, 146.

抱しており、進歩への強い欲求があるときにのみ効果的である。デューイの哲学が最初に適用された組織である学校こそが、我々のすべての組織のなかでもっとも柔軟性がある。今日、我々の社会生活における諸々の心構えの中で、教育しようとする意志ほど理性的な動機づけに基づいているものはないように思える。教育は、おそらく教育のみが、「道具主義的」(“instrumental”)な哲学の絶え間ない圧力の影響を受けるのである。まさに知性が、一つの組織——つまり文化的社会に必要な態度や個人の幸福のために必要とされる能力を形成するうえで、最大の可能性を秘めた組織である学校——を意識的に制御しようとしていると思われたのだった。

教育とは何かについての革新的な概念、そのアプローチの知的戦略に関して、我が国は、デューイ教授の哲学から影響を受け、その測り知れない恩恵を被っている。理性的な国民なら、こうした思想を誠実に受け止めて、教育をその国家的事業にすることを選んだであろう。天空が落ち、地が振動しようとも、この国家的事業にそのエネルギーを注ぎ込んだであろう。しかるに、国民は紛争からの孤立を利用して、自らを教育することをしなかった。三年間イライラと逡巡したあげくに、教育ではなく戦争が選択されるのを許してしまった。しかも、それは知識階級のほぼ全員一致の強い要請によってなされ、その動機ときたら、我々の文化的要求とは無縁のもので、個人の幸福とは無縁の政治的目的のためになされたのだ。しかし、諸国民というのは当然ながら理性的な存在ではない。帝国の威信への形而上学的な脅威に直面して、戦争こそが自分たちがなすべき最重要事だとして受け入れてしまうとき、彼らは最も非理性的な本性に基づいて行動するのだ。ここで我々が最も気がかりなのは、デューイ教授を先頭にしたプラグマティストの知識人たちが、さしたる困難もなく、自分たちの哲学の場を、いっさいがっさい、教育から戦争へと移し換えてしまったということである。国家的事業のこのような突然の方向転換に際して、何らかの感情の吐露や謝罪があって当然と思えたのだが。デューイ教授は、その楽観主義から、戦争は実質的に我々の発展に向けての意気を阻喪させることはないであ

ろうし、恐らく、戦争は結局のところ我々の国民生活の偶発的出来事にすぎないであろうと、自らに言って聞かせたのかもしれない。しかし、膨大な戦費で我々が破産状態に突入していくときに、戦争テクニクに直接的な貢献をしない教育的事業に使える財源があるとは考えにくい。ましてや、大群になって押し寄せている軍国主義的価値観や、いたるところ毒キノコのように増殖している新しい権力欲がひしめきあう中で、成長発展のための情熱、創造的な卓越のための情熱が広がっていくことはないであろう。

いかにして、プラグマティストの精神は、激しい抗議もなく、悲痛の念もなく戦争を受け入れてしまうことができたのであろうか。デューイ教授とその友人たちは、大勢に逆らうのはもう無理で、戦争は避けがたく、其の時流のなかで盲目的に漂流するより、事態に知的に対処したほうがいいと感じたのか。それとも、彼らは、国内では民主主義的価値観への妥協なき敬意をもって、さらには、すべての苦難の末に到達する国際的な民主主義を視野にいれて、勇敢な戦争が闘われることを予想したのか。もし、彼らの動機が前者であるならば、出来事を制御する可能性の範囲をゼロに近いところまで狭めてしまったように思える。もし戦争が阻止できないほど強力なものであるなら、それをうまく制御したり、リベラルな目的のために新しい鋳型に入れたりするなどということが可能であろうか。そして、もし彼らの動機が第二のもの、つまり断固として戦争を良い方向に形作っていくことであつたなら、彼らには戦争の猛々しい緊迫性という点に関して全くの誤算があつたように思える。自分たちの希望が実現したものとして、彼らは、一方で効力が危ぶまれる国際連盟の設立と、(戦争反対の)世界産業労働者組合(IWW)の弾圧⁶というなりゆきに満足するこ

6 世界産業労働者組合(Industrial Workers of the World, IWW)は、1905年にビル・ヘイウッド(William Haywood)、ユージン・デブス(Eugene Debs)らの労働組合指導者や社会主義者によって結成された。1916年11月には、組織として戦争に反対する決議が出された。翌年には、IWW事務所に対する一斉捜索が行われ、戦争関連産業でのストライキを組織したとして防諜法違反で有罪判決を受けたヘイ

とになるのであろうか。しかしながら、戦争という状況がもたらす麻痺させるような力のために、彼らは自分たちの哲学に何が起きているのかを認識できずにいるように思える。初期の希望が裏切られても、彼らは全く意気消沈することはなかった。一方で、裏切られも、そうした希望を実現するために使われるはずの活力を、もっと精力的に示そうと駆り立てられる様子もなかった。僕はデューイ教授の一連の論文のなかに、現在、あるいは戦後の再建にあたって、国内的あるいは国際的にどのように我々の民主主義的要求が具体的に実行されるかに関しての手がかりを必死で探そうとしたが、その努力は徒労に終わった。いかなるプログラムも示されていないし、現在の茫漠とした大衆的な運動や反抗への共感も見られない。それどころか、後者は、曖昧で非実用的だとしてお叱りを受けているのである。同様に言えることは、デューイと共に戦争の同伴者となった他の道具主義(instrumentalism)の預言者の場合もそうだが、民主主義は吟味されていない単なる用語に留まっており、それは戦闘を呼びかけるお題目としては便利だが、変化していく未来のために新しい地盤を掘り起こす知的道具としてはまったく活用されていない。我々が戦っているのは、実は金権政治家が牛耳っているアメリカの(政治的)民主主義のためなのか、それとも、新しいロシアの社会的民主主義⁷のためなのか。我々の支配者が最も恐

、ウッドを初め、多くの IWW の組合員が逮捕された。中田幸子によると、「IWW のポスターには、『兵士になるな、人間であれ。IWW に加入して自分や自分の階級のために職場で戦え』と書かれていた」という〔中田幸子『文芸の領域で IWW を渉猟する』(国書刊行会、2009)、57〕。他にも、John S. Gamsbs, *The Decline of the I.W.W.* (New York: Russell & Russell, 1966) などを参照されたい。第一世界大戦中の反戦ラディカルへの弾圧については、常松洋「レッド・スケア」今津晃・横山良・紀平英作編『市民的自由の探究 ― 両大戦間のアメリカ』(世界思想社、1985)が参考になる。

7 ボーンは、1917 年 8 月号の『セブン・アーツ』に掲載された「アメリカの戦略の崩壊」のなかで、ロシア革命(2 月革命)後の状況に触れて、「平和への先導者は今や、ウィルソン大統領の手から労働者・兵士評議会(労兵ソヴィエト)に移行

れているのは、帝国ドイツの脅威なのか、それとも、解放をもたらすような社会主義ロシアの影響力なのか。政治に彼らの哲学を応用するにあたって、我々のプラグマティストたちは、目的という極めて重要な問題から目をそらしてしまっている。デューイは、我々の目的は熱狂的な愛国主義ではなく、知的な国際主義でなければならないと言っている。しかし、これで我々の方向性の距離が縮まるわけではない。

この難しい時代にあって、リベラルやラディカルにとって光明であったものは暗闇になりつつある。ラディカルは、大会を開いて彼ら自身の忠誠を証明し、「内なる敵」を排除するのに時間を費やしているが、こんなことでは新たな知的道筋を捜しあてることにもなっていないし、我々が信念と良心をもってわが物にすることができるような輝かしい思想を提供してもいない。我々のなかで心が折れやすいものは精神的な無力感に囚われ、他の連中は必死でそれと戦っているのだが、その主な原因は、こうした無力感を消し去ってくれるような明

ゝした」と述べている。また、1917年5月にアメリカ国務省がストックホルムの社会主義者国際大会に出席しようとしたモリス・ヒルキット (Morris Hillquit) らの社会主義者へのパスポート発行を拒否した件に触れて、この行為は、この大会に熱心だった「ロシアの民主主義」に冷や水を浴びせかけるものだというコメントをしている。Randolph Bourne, "The Collapse of American Strategy," in Resek, ed., *The War and the Intellectuals*, 28 を参照されたい。クレイトンは、「後進国ロシアで革命が起こったというニュースもまた、ボーンのラディカリズムを再熱させた」と述べているが、ボーンがレーニンやマルクスの書物をどの程度読んでいたかは明らかではないという (Clayton, *Forgotten Prophet*, 218, 251)。ストックホルムの国際社会主義者大会に参加したのち、ベテルブルクから10月革命についてのルポ [*Ten Days that Shook the World* (1919) として出版] を送ることになるリード、あるいは *Marx and Lenin: The Science of Revolution* (1926) の著者でもあるイーストマンなどの友人から、ボーンがロシア革命およびレーニンについて様々な知識を得ていたことは確かであろう。ただし、『偶像の黄昏』執筆の時点では、ロシアの状況は極めて流動的で、かつアメリカで得られる情報も限られていたことも注意して読む必要がある。

確なビジョンが存在しないことにある。戦争遂行のために共同歩調を取っている元社会主義者、労働組合のラディカルたち、そしてプラグマティストの哲学者に、一貫した説得力のある民主主義的プログラムを示してもらいたいものだ。そうすれば、彼らはもはや、良心的な者たちやどうしてもなく非現実的だとされる連中の懐疑主義に遭遇することはないであろう。しかし、実際に強調されているのは、思想の組織化ではなく技術的な組織化であり、様々な人間的要求ではなく戦略である。なんらのプログラムも提供されていないのは、彼らにはそうしたプログラムがもともとないのではないかと思えてしまう。この戦争テクニックの議論へと逃げを決め込むやり方は、本来民主主義的哲学が存在すべき場が空洞であることを覆い隠すものである。我々の知識人たちは、敏速には行動しない大衆が本当は何を望んでいるのか、我が国の最良の希望はどの方向に向かっているのかといった本質的問いに向き合うことを避けたいがために、ひたすら戦時委員会との協議に夢中になっているのである。同様に、ラディカルたちの燃えさかる愛国主義は、彼らの知的な光が弱くなってきていることを隠蔽する役割をはたしているのだ。

戦争の勝利が達成されるまで、民主主義的目的の明確な定式化は延期されるべきだというのが、彼らの答えなのだろうか。しかし、このような返事をすることは、民主主義的目的を明確にするという試みそのものを投げ出したのも同然だ。というのも、彼ら自身の言い分によれば、ラディカルたち、現実主義者およびプラグマティストが戦争を支持するのは、単に民主主義の大義を救うためだけではなく、その進歩を加速させているからだということだった。それなら、民主主義が新たに獲得したものとは何なのか。それらはどのようにして保全されるのか。それらは何につながっていくのか。我々は、それらをどのように進化させていけるのか。それらは一丸となって、どのような社会の大きな目的のために進んでいくのか。これらの問いを無視し、戦争テクニックとそれに伴う献身のみを考えることは、こうした人びと自身の信念の土台そのものを台無しにすることである。

まず戦争の勝利が第一という方針は、ラディカルたちにとっては、知的自殺に等しい方針である。戦争を支持するなら、彼らには、民主主義のために得られるものを一つずつ示し、諸々の希望を具体化する憲章の構想を練る責任がある。それが出来ないならば、彼らはまったく無能力で、戦争の奔流に彼らの期待は押し流されてしまったことを告白していることになる。あるいは、彼らは真に想像力に富む存在ではなく、将来のリーダーになる見込みはないことを告白したのも同然である。

III

デューイ教授を、スバルゴー氏やゴンパーズ氏やA・M・サイモンズ氏⁸あるいは自警団と同列に扱うのはいささか公平さを欠くと思われるかもしれない。僕がそうするのは、他でもない、彼らは戦争受容の姿勢⁹において、デューイ

8 ジョン・スバルゴー (John Spargo) は、『子供たちの悲痛な叫び』(*The Bitter Cry of Children*, 1905) や『応用社会主義』(*Applied Socialism*, 1912) の著者で、ウィルソンの戦争方針を批判した社会党から、1917年に離党した。サミュエル・ゴンパーズ (Samuel Gompers) は1886年からアメリカ労働総同盟 (American Federation of Labor) の会長であった。オルギー・M・サイモンズ (Algie M. Simons) は、社会主義者の歴史家で、『アメリカ史の中の諸社会勢力』(*Social Forces in American History* (1911)) の著者である。[原注：Ⅲの注1]

なお、アメリカ社会党は、第一次世界大戦にアメリカが参戦した1917年4月7日にセント・ルイスで臨時党大会を開き、帝国主義戦争への反対を表明する「セント・ルイス宣言」を採択した。かつてボーンがその講演を熱心に聴いたウィリアム・イングリッシュ・ウォーリング (William English Walling, 1877-1936) やスバルゴーなどの社会主義者の知識人たちは、一般の社会党員が参戦反対を決議するなかで、それに抗議して退場した。第一次世界大戦への社会主義者の対応については、John P. Diggins, *The American Left in the Twentieth Century* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1973) に詳しい。他に Markku Ruotsila, *John Spargo and American Socialism* (New York: Palgrave Macmillan, 2006) などがある。

9 スバルゴーは社会党離党後に、ゴンパーズとともに、アメリカ政府の後押しを受

教授があんなにも説得力があり、人を魅惑する言葉で公式化し、広く流布させたアメリカ的「道具主義」哲学を、揃いもそろって具現しているからである。さらに、はるかに知的な領域においても、デューイは、この戦争が民主主義的な目的によって動機づけられており、その目的に奉仕するものだと確信している点で、他の連中と同じなのである。高揚した自信と自己正当化のムードが彼ら全てを動かしており、自分たちこそが諸々の出来事を制御しているのだという強烈な感覚が、彼らをデューイ教授の哲学の弟子にふさわしくしている。彼らは一様に、戦争を可能な選択とは思えない者たちや、戦争に無関心な連中に敵対し、現下の危機を利用して民主主義にとっての戦利品を確保しようと快活にきびきびと勤しむ姿勢以外のいかなる態度にも敵意を向けるのである。戦争が民主主義のための好機として本当に使われているのかという問いを発するのではなく、この目的のためにうまく戦争を利用していますよということをことさらに興奮気味に吹聴しているのだ。こうした全員一致の態度は、戦争を忌避する者を場外に押し出す結果となる。しかし、そのような者にも、冷酷かつ無慈悲な現実の中には居場所を持たない哲学が、なぜ戦争というまさに冷酷にして無慈悲なものに、かくも安易に順応してしまうことになったのかを説明しようとすることはできる。さらに、ある目的のために手段を用いるという創造的な知性の哲学であるにもかかわらず、その哲学が現下の状況で民主主義的価値を全く示すことができないでいることの理由を説明することもできる。

この哲学は、一体どうなってしまったのだ。我々は、一つの知的な時代の終わりにきて、突如、立ち止まることを迫られているかのような感を抱いている。この危機にあって、知的な制御を旨とするこの哲学は、我々の必要性に答える

ゝけた戦争支持派の労働団体である「労働と民主主義のためのアメリカ連盟」(American Alliance for Labor and Democracy)の指導者となった。同じく戦争賛成派のサイモンズは、社会党のミルウォーキー支部から追放処分を受けたのち、ウィスコンシン在郷軍人会の指導者となり、学校でのドイツ語教育や非愛国的活動などを禁止する活動に参加した。

ものになっていない。この哲学には何かが欠けているということは、安まることのない我々の張りつめた心に突き刺すように感じられるのだが、この不充足の源泉はどこにあるのだろうか。ヴァン・ワイク・ブルックスは鋭い洞察力で、我々のプラグマティストの「覚醒者」たちには詩的なビジョンが欠けていると指摘した。こうした現実的態度には、なにか詩的ビジョンに敵対するようなものがあるのだろうか。あるいは、生活の機械的反復を超越した生活の質そのものへの興味を阻害するような何かがあるのであろうか。明らかにそのようだ。戦争によって、プラグマティストの支配する時代に訓練を受けた若い知識人集団は、官僚的に物事を推進していくのはお得意だが、知的に物事を解釈したり、理想主義的な観点から諸目的を焦点化したりすることに関しては気の毒なほどに準備ができていないことが露呈したのだ。ベルギーで働く若者たち、将校予備隊、ワシントンの評議会や各地の戦時組織に組み込まれていった若者たちの中には、明らかにそれとわかる連中がいて、彼らに対して、老練な哲学者デューイが法王のように祝福を与えてもおかしくないのだ。こうした連中は、科学的方法の秘訣を吸収し、政治的行政に応用する。彼らは、リベラルで、啓蒙されており、世事に通じている。政治的および産業的問題を解決しようとする際にも、彼らは創造的な知性をほんのりと滲ませている。彼らは、アメリカの生活のなかの全く新しい勢力であって、大学教育の重点が、古典的学問から政治的・経済的価値を強調する訓練へと移行していった時代の影響を受けている。こうした連中のほぼ全員が、戦争テクニクに奉仕しているといってもいいほどだ。戦争とこれらの若者たちとの間には奇妙な親近感があったように思える。まるで、戦争と彼らはともに相手待ち望んでいたかのように。戦争がなければ、彼らにとって自分たちの知性を発揮できる範囲はどの程度のものであったのか。おそらく彼らのほとんどは産業界に入って穏健な企業再編計画に身を捧げていただろう。重要なのは、彼らにとって戦争が魅力的だったのは、その政治的あるいは解釈上の目的ではなく、その技術的側面だということだ。彼らが受けた教育の中で、彼らの技術的な能力は大いに進歩を遂げたが、その

一方で、価値や理想を明確に表現したり、的確で示唆に富んだ新しい思想を生み出したりする力は、はるかに遅れをとることになった。結果として、知的な系統的論述という領域では、この若き知識人集団を見回しても、人材は不足している。彼らが戦争を組織化している最中にも、世論形成は主に、玄人の愛国主義者や扇情的な編集者や古株のラディカルの手に乗ねられている。この若い知識人集団が本来行うべき世論形成といった知的作業は、皮肉にも、国賊捜しに躍起になっている自警団によって担われ、それ以外には僅かに、最後の救いともいえる年配のリベラルたちによってなされているにすぎない。確かに、デューイは、戦争目的や思想にもっと注意を向けるように呼びかけているが、そんな言葉には誰も耳を傾けていない。彼の弟子たちは、人生に対する道具主義的な態度をあまりにも文字通り学習してしまったおかげで、おまけに、非常に知的でエネルギーに満ちた連中だったものだから、上から宣告された目的を一点の疑問もなく鵜呑みにして、自ら戦争テクニックの効率的な道具になってしまったのだ。こうした目的は大体において否定的なものであるということ、彼らは気にしてもいない。というのも、彼らは、思想を技術に従属させないということを学んだことはなかったからだ。彼らの受けた教育においては、広大な思想の一貫したシステムもなければ、民主主義的な目標に到達しようとする感性を育むこともなかった。要するに彼らには、知的な奉仕の哲学、つまり、称賛に値するほど目的に手段を適応させること以外には、明確な人生哲学はない。彼らは、いかなる社会を求めているのか、どのような社会をアメリカは必要としているのかについては曖昧であるが、それを手に入れるのに必要なすべての行政的態度や手腕を兼ね備えているというわけだ。

デューイの哲学を、我々のアメリカの宗教に近いものとみなした我々は、価値が技術の配下に下るなどということは考えたこともなかった。我々は道具主義者ではあったが、我々の脳理にははっきりと、我々それぞれの私的なユートピアの姿が浮かんでいたもので、手段は単にそれに寄与するものであって、けっして出しゃばることはなかった。そして、もちろんデューイは、彼の哲学が人

生哲学とみなされるときに、それは諸価値とともに始まるものといつも考えていた。しかし厄介なことに、彼の説には、いかに価値は作られるのかという点に関して曖昧さがあり、その目的を達成する限り、いかなる成長も正当化され、いかなる活動も価値があると仮定することが、だんだんと容易になってしまった。この哲学を自らのものにしたアメリカ人は、結果と（意識的な）成果を混同する常習犯となり、自らが到達しようとしているのが望ましい場所であるかどうかを吟味することなく、首尾よく到達点に行き着くことだけに満足してきた。今や、生き活きとした詩的ビジョンから出発しなければ、あなた方の道具主義の行き着く先は、戦争という国家的事業にいそいそと忙しそうに取り組んでいるこの若い知識人集団が着地したのと同じ地点になるだろう。あなた方には、まずビジョンが必要で、その次に技術が必要となる。デューイの哲学が実質的な影響力を発揮したとき、それは、前者を犠牲にして後者の感覚を発展させることになってしまった。デューイ自身は、両者を一緒に発展させようとしたのだが、その彼でさえ、戦争の影響下で、価値の側面が手薄になっている感がある。『ニュー・リパブリック』は、その面子にかけて、連合軍の優先順位は、軍事的戦略より政治的目的に、技術よりも民主的価値にあると、しきりに書きたてている¹⁰。しかし、戦争というものは常に、価値をだいなしにしてし

10 1914年にハーバード・クロリー (Herbert Croly, 1869-1930)、ウォルター・リップマン (Walter Lippmann, 1889-1974)、ウォルター・ワイル (Walter Weyl, 1873-1919) によって創刊されたリベラルな週刊誌『ニュー・リパブリック』は、コロンビア大学卒業後 (1913年に社会学の修士号) のボーンの文芸・時事評論家としての当初の活躍の舞台となった。しかし、第一次世界大戦へのアメリカの参戦をめぐって、ボーンはリップマンなどの編集者およびデューイなどの寄稿者と対立するようになった。『ニュー・リパブリック』は、1916年の初めには、「世界を改善するためにその影響力を用いる」という「攻撃的平和主義」(aggressive pacifism) を唱えていたが、ドイツによる潜水艦攻撃が激化した1917年の2月には、「ドイツを文明に引き戻すために戦わなければならない」との論調に変化した。さらに1917年3月末には、戦争に参加することで国内諸機構の効率的で民主的な再

まうものなのだ。この戦争全体を通して我々にとっての顕著な教訓があるとなれば、こういうことだ。つまり、政治家たちは、価値を優先させるような視点を理解できず、彼らの唯一のモットーとは、まず戦争に勝って、そこから手に入れられるものは何でももらっておこうということなのだ。こうした政治家の指向と戦おうとしても、彼らに挑戦状をたたきつけるだけの極めて明確で、断固とした革命的な民主的思想とプログラムの用意がなければ、それは我々の負け戦になるに違いない。我々の状況に問題があるとすれば、それは、様々な技術が優先されて価値が無視されているということだけではなく、あくまで価値が最重要だとして奮闘してきた連中のビジョンが近視眼的で、血が通っていないということなのである。「順応」と「適応」を重んじる哲学の欠点とは、たとえば、その含意するところが変化する生きた状況への適応だとしても、その哲学の想定を越えてしまう経験や思考への準備がないということである。あなた方の理想が、自分たちを取り巻く状況への適応、現実との輝かしい協力関係に身を置くことであるなら、成功とは、まさにそれだけのことで、それ以上ではありえない。あなた方は何かを超越することはできないのだ。あなたがたは年月を重ねても、その精神が飛翔して、奇想天外な冒険へと出立していくことはないのだ。もし、広報担当改革者としてのあなたの方針が、手に入りそうなものを頂くということならば、手に入れようと考えているよりもはるかに少ないものにしかありつけないであろう。講和協議のなかで、イタリアは20を得ようとして100を要求しているといわれている。ラディカルも、このマキアベリ的原理を採用してもいいのではないか。ビジョンは常に技術よりも突出していなければならない。ご都合主義者がその努力によって達成できるのは、たい

ㄨ編が可能になると参戦支持論が展開され始めた。『ニュー・リパブリック』と第一次世界大戦との関係については、Christopher Lasch, *The New Radicalism in America* (New York: Alfred A. Knopf, 1965), Chapter 6; Paul F. Bourke, "The Status of Politics 1909-1919: *The New Republic*, Randolph Bourne and Van Wyck Brooks," *Journal of American Studies* 8 (1974): 171-202などを参照されたい。

ていの場合、明らかに可能だと思われること以下のことである。世間から、どうしようもなく非現実的だといわれる連中(impossibilist)は、まさに彼方のものを手に入れようとする情熱の故に、(現実への適応主義者よりも)ずっと先を行くのである。適応の哲学は、適応することの役にすら立たないであろう。もし、むこうからやってくる事態に場当たりに「対応」しようということなら、それは、事態を受け止めていることにすらならない。それどころか、あなた方の借金や滞納金は溜まる一方で、いつか破産に追い込まれることになるだろう。

我々が戦争の渦中にいるのは、新しい価値を創造し、各国がそれに向かって進んでいく大枠の基準を作っていく代わりに、アメリカ政府が小さな目的のために、適応の哲学と道具主義を実践しているからだ。たんなる適応を良しとする知的態度、事態の進捗を図るために創造的知性を単に利用しようとする態度は、最後には、慎重さや退化をもたらすだろう。そうした態度を取るかぎり、あなた方が将来を見据えて望ましいと判断した変革ですらも、その実現が危ぶまれるのである。これが、このところ耳にタコのできるほど聞かされている政治的・社会的リアリズムという代物に対して、我々が不満を抱く理由である。そのリアリズムは、善良さや賢明さに満ちているが、すべての人々が駆り立てられ惹きつけられるような奔放なビジョンに欠けているのである。

IV

我々の知的生活の中で、このアメリカ哲学を実践しようとすると、それは、生活の質を犠牲にして生活の技法だけを途方もなく強調することになる。我々は精神的価値の不足に苦しんでいる。このアメリカ哲学は、もっと情熱的な生き方が可能になるようなアメリカン・ライフの物質的基盤を確保しようとしているときにはうまく機能したのだが、戦争という冷酷で無慈悲な災禍と群衆のヒステリアに直面している今は、もはや機能していないのである。現在一般に

流布しているこの哲学の言辞にはどこか自己満足の調子が見られ、それはなんとも後味の悪いものである。逆に、現下の情勢にもっともふさわしい色調とは、たくましい絶望、つまり、苦難の中から新しい価値が生まれ、我々の民主主義的な方向性のほのかな光が見えてくるまで、怒り狂い、戦いを挑むような絶望なのである。こうした新しい価値を生み出していこうとするとき、恐らく、古い哲学、そして古いラディカリズムをあてにすることはできないであろう。それは、ある種の臨界点に到達し、そこに留まるであろう。それは、真剣そのものの若いリベラルたちによる戦争の技術的組織化という形で開花し、彼らは、国内での国家社会主義と国外での寛容なる帝国主義諸国の連盟というご都合主義的なプログラムによって戦争の舵取りをしようとしている。どんなにがんばっても彼らにできることと言えば、政治家どもの代りに、慎重で学のある大学人を政府の長に据えるくらいのことである。彼らにできるのは、よくても、搾取で得られた収奪物をみんなで山分けすることで戦争をやめることである。たったそれだけののだ。彼らの技術的手腕には拍手をしてもいい。ただ言えることは、彼らの展望にはどう見ても、個人の幸福とか、個性の生き活きとした表現とか、社会的諸力への理解とか、芸術的な感覚とか、つまり、生活の質に触れるようなものがないのだ。価値の創造者、あるいは価値に重きを置く人びとであったはずの我々の知識人たちは、我々を落胆させた。戦争における英雄的武勇の魅惑は過去のものになったが、それに取って代わったのが、技術的なものの魅惑である。新鮮で本物の思想、自由な思考、芸術的な活力、文化的なスタイル、豊かな感情に満ちた知性、知性によって裏打ちされた感情が、人々を惹きつけるものとして提示されてこなかったし、我々の支配的な哲学が道具主義的なものである限りは、その可能性は薄いように思える。

こうしたものの魅惑を自ら示すことができるような人々はどこにいるのだろうか。それができるのは、完璧なまでに不満を抱いた人々である。現状への苛立ち、アメリカの生活から生じる絶え間ないフラストレーションや無味乾燥さに対する憤懣、自分自身および、我こそが希望の星と自称する様々なグループ

への根深い不満——こうしたムードから、新しい価値が苦心の末に創りだされるかもしれないのである。こうした不満分子とは、戦争、そしてそれに追隨して出てきた反動的理想主義に我慢のならない男性や女性である。彼らは、個人的な愚かしさのせいで文化的価値が死滅するのを許してしまったプロの批評家や古典研究者たちのことはもう相手にしてはいない。とはいえ、こうした不満分子は、破壊だけを目的とする文化的破壊主義者になるつもりはない。彼らは野蛮人ではなく、あらゆる場所で、本質的なものや誠実なものを求めているのだ。彼らが望んでいるのは、モダンな精神の方向づけである。これは、急速に進行し、戦争によって加速されているテクニカルな方向性に伴って出現しつつある新しい方向性なのだが。彼らは、手厳しく、不機嫌で、物事が崩壊していく時代に温厚さなどもってのほかとを感じるだろう。彼らは、精神的冒険や不気味な想像上の探索を好むであろう。彼らが闘いを挑むのは、ピューリタニズムというよりはむしろ、自己満足のムードであろう。彼らが文学に求めるのは、ピリッとした味、苦み、知的な気骨、気迫である。彼らが最も激しい敵意を抱くのは、倫理的自主性のない追隨主義者、今やナショナリズムの利害のためにすべての自由な思考を抑圧しようとしている、あの説明責任を果たしていない自称ラディカルたちだ。不満分子たちは、常により嘲笑的で不遜な表現が好ましいと感じるであろう。彼らはあらゆる組織を馬鹿にしてい、おめでたいラディカルたちが、役職やシステムを大真面目に考えていることに、驚きを禁じ得ないだろう。彼らは齒に衣を着せずに自分たちの侮蔑の念を口にし、からかったり、挑発したり、イライラさせたりしながら、あらゆるトピックについて思索的営為へと人を誘うであろう。こうした不満分子は往往にして、アメリカの才能ある若者の一群であろうし、かれらは、かつてなら、すぐにヨーロッパに居場所を求めたり、そうでなければ、国内で為すすべもなく精神的飢餓に耐えていたりしたものだ。しかし、こういう人々は、ヨーロッパに行くこともなければ、国内で手をこまねいて飢餓に陥ったりすることもない。彼らの感情や感性は、アメリカン・ライフの可能性と切っても切れない関係にあるので、

アメリカを去るようなことはしないし、座して死を待つようなことは考えてもいない。だから、彼らは、壁に頭を打ち付けながら、血だらけになるか、さなければ、光が差し込むまで、自分たちの流儀でやっていこうとするだろう。こうした連中は、一体彼らが何を考えているのか理解できない年配者の気分を害することになるだろうし、若い世代の中でもより順応しやすい者たちが容易に受け入れてしまうことになる中年の冒険心に冷や水を浴びせかけることになるだろう。楽観主義とはしばしば代償的なものであって、アメリカの思想に内在する楽観的なムードというのは、単にアメリカン・ライフは正面から向き合うにはひどい代物だということを意味しているのかもしれない。実のところ、より懐疑的で、意地が悪く、絶望的でアイロニカルなムードこそが、今日、アメリカで醸成されつつある活き活きとした刺激的な生活の徴候であるかもしれないのだ。それは、もしかしたら、希望の徴であるかもしれない。ニーチェが我々に呼びかけているような、知的な「闘い」と「笑い」への渇きこそが、楽観主義に取り憑かれた諸哲学がもたらしてくれないような満足を我々に与えてくれるのかもしれない。不満こそが約束の始まりなのかもしれないのだ。戦争によってプラグマティズムの足取りが、どこか散文的でありふれたものになっていると感じている僕が、様々な想念を生み出す陽気な情熱と自由な思索を好むウィリアム・ジェイムズを呼び起こそうとしたのは、まさにこのためである。我々が飛躍しようとするなら、必要とされるのは、創造的知性¹¹よりもむしろ創造的な欲望なのだ。

11 デューイは1917年に『創造的知性』を出版している。John Dewey, *Creative Intelligence: Essays in the Pragmatic Attitude* (New York: Henry Holt & Company, 1917).